

---

# キラトシュン

露露

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

キラトシユン

### 【Nコード】

N4577E

### 【作者名】

露露

### 【あらすじ】

ぼくたちは戦国時代では騎士<sup>ナイト</sup>なんだ。同じ国に属していてね。それは空想か現実か。二人の少年による、少しせつない物語。  
全四話完結。

## 第一話

ぼくたちは戦国時代では騎士<sup>ナイト</sup>なんだ。同じ国に属<sup>ナ</sup>っていてね。

シユンはどんな時も空想ばかりしている。

肌は透き通るように白く、日焼けしたぼくの腕の半分ほどの細さしかない。

誓いを済ませた騎士は、馬に乗って、大きな剣を振りかざし、一緒に戦場を駆け抜ける。とても勇敢で無敵の戦士なのさ。

綺麗なその双眸を細めて呟くと、高く晴れ渡る空を見上げた。みつめるシユンの横顔が、その時とても幸せそうだと思ったのは何故だったのだろうか。

騎士は戦いながら、扉を探している。とても、とても大切なものが、その中にあるから………

幼さを残した声が、急激に胸に蘇る。そして、ぼくはやっと気付いた。

シユンはずっと探していたんだ。

求めてやまない扉のありかを。

\*

\*

\*

「シユン！」

はっと振り返ると、フェンスを挟んだ所に立っている白い肌の少

年が目映る。数人の生徒たちが彼を囲んだ。

ぼくは釘付けになって見ていたが、間もなくその集団は笑い声を立ててその場を後にする。何となくそれを見送ったぼくの口からほつと息が漏れた。

「なに溜息なんてついてるんだ綺羅<sup>キラ</sup>？試合中だぞ！」

「ああ、ごめん。今戻るよ」

「シユンだろ？あいつもうすぐ<sup>アメリカ</sup>美国に行くらしいぜ。だからみんなああやってあいつにまわり付いてるんだよ」

「うん、知ってる」

「人気者はつらいよなあ」

友人は冗談めかして笑いながら、グラウンドを転がる白黒のボールを目指し駆けて行く。早く来いよ！と促され、ぼくも後を追った。そうだ。ぼくが知らないわけがない。シユンが美国へ行くって、クラスでも専らの噂なんだ。

誰だったかはよく覚えていない。クラスの女の子だった。その情報を本人から聞いたから出任せではないと主張していた。

だから、知っている。

「綺羅！ボール行ったぞーっ」

「おう！」

少しズレたスピードのあるパスを受け、一気に加速する。横からの一人をひらりとかわした。

「綺羅を止めろっ！」

「行けーっ綺羅！」

前からの二人をくるとかわすとセンターラインを超えていた。ぐんぐんスピードがあがる。

一人、二人、三人 邪魔してくる敵チームを軽々と追い抜き、気が付けばゴールは目の前。

羽が生えたように、気持ちがいい。

ぼくには敵などいない。

「綺羅っ！！！」

力の限り蹴ったボールがゴールに吸い込まれる。

瞬間、歓声と溜息。

「よしっ！」

ガッツポーズと共に吐き出した掛け声は、さっきまでの憂鬱さを丸ごと吹き飛ばした。会心の笑みでグラウンドを駆ける。

ここでは、ぼくは無敵だ。

\*

\*

\*

家に帰り玄関の扉を開けると、見慣れない靴が目に入った。居間を覗くと一番に母と目が合い、ぼくは、ただいま、と言った。

その声に反応して客人が振り向く。

「綺羅くん、久しぶりね。相変わらず元気そう」

「小母さん」

シュンの母親だった。軽く会釈して返すと、明らかにやつれた頬が緩む。ぼくは母に視線を向けて、そのまま部屋へと退散した。どつとベッドに体を沈めると、薄汚れた天井に瞳を向ける。とくとくと心臓が鳴っているのが聞こえるほど、部屋は静寂に包まれていた。

シュンの小母さんと会うのは確かに久しぶりである。

毎日のように顔を合わせていた小学生の時とは違い、中学生になってからは三年生になる今まで全くその機会を逸していた。

というのも、もう長い間シュンとは疎遠になっていたからだ。ぼくらの小学校は規模が小さく、一つの学年に一つのクラスしかなかったが、中学校は町の大きな学校へ通う決まりだ。その時に初めて、ぼくとシュンはクラスを離れた。

あれだけ仲が良かったのに、いつも一緒だったのに、結局ぼくたちも同じクラスという些細な繋がりがりしかなかったのだ。それぞれに、

それぞれの友人が出来、いつの間にかぼくらは一緒に登下校をすることも止めた。

「……シユン……か」

けれど、少なくともぼくは、シユンと繋がりを絶ちたかったわけでは決してない。もやもやとしてくる心の内がきつとそれを物語っている。

今日、グラウンドの外に立つシユンは、一層青白くなったような気がした。もうどれくらい、話していないんだろつか。どんな声をして、どんな風に話すのか、思い出せないほどに。

一旦疎遠になってしまつと改めて話しかけるのも億劫になった。それでもいつだったかシユンの家を訪ねたこともある。さんざん迷った挙句、勢いでインターホンを押したぼくを待っていたのは、開かれることのない無言の扉だった。小父さんと小母さんは出かけていたのかもしれない。シユンもまだ帰宅していなかったのかもしれない。

ぼくは、まるで好きな女の子に告白する時と同じくらい速まっていた鼓動の分、失望も大きかった。それ以降、あの扉を見ていない。

「……アメリカ……<sup>アメリカ</sup>……<sup>アメリカ</sup>……」

近くて遠い、ぼくらの距離。

## 第二話

ボオ ……ボオ ……

重く低く響き渡る笛の音は、戦闘開始の合図。

馬に乗った騎士たちが、真直ぐ前方を見据えている。迎え撃つは同じ騎士の身なりをした異形の者たち。

「綺羅！」

名を呼ばれ振り返ろうとしたが、戦いは始まった。流れに任せ一気に前進する。叫声と蹄の音が轟き、戦場はすぐに混沌と化する。

次々と敵を倒すべくは、ここでは無敵だった。誰もが恐れる騎士。ただひたすら目指すは敵の將軍。

「綺羅！」

又、同じ声が呼ぶ。

大きな剣を振り上げ、眼前に立ちはだかった壁を薙ぐと。

「駿<sup>シユン</sup>………？」

恐らく戦場には不似合いの、透明な肌を持つ美貌の騎士がそこにいた。

笑みを湛え、勇ましく。

「僕の声を忘れたのか？綺羅」

「し」

驚愕を隠し切れないように背を向け、駿はまた混沌へと向かって行こうとする。

「駿！」

「行こう、綺羅、一緒に 敵将はすぐそこだ」

駿は高々と剣先を空へ向け駆け出した。ばくもその後を追う真横に並ぶ。

ばくらは敵と剣を交えながら、同時に、前進する。

誰よりも速く、誰よりも確実に。

「駿！危ない！」

「っ！」

背後から迫った敵に気付き、間一髪、駿が攻撃を回避する。その間にぼくが回りこみ、思い切り敵の背を突いた。敵の騎士は落馬する。

「綺羅」

「………駿、やった」

ぼくの視線の方向へ駿も目をやり、その身なりと印を確認すると、ぼくらは再度顔を見合わせた。

「敵将、取ったぞ　！」

ぼくは叫びながらも、高ぶる気持ちを抑え切れない。

言葉に出来ないこの清清しさと気持ち良さは、一体なんだ？

「綺羅」

馬上の駿が綺麗な目を細めてぼくを見る。ぼくも頷く。

そうだ。きつとこれだ。

駿と、一緒に走っていたい。

どこまでも、この距離のまま。

\*

\*

\*

学校の廊下でばったり、シュンを見つけた。一人で窓の外を眺めている。

陽に透けて茶色に輝く細い髪が微風に揺られ、相変わらず透けそうなほど青白い頬に触れる。少し髪が伸びたかなとぼくは思ったが、それも当てにならない感覚だった。こんなに間近でシュンを見たのも久しぶりだからだ。

ぼくは一つ息を呑んだ。

声をかけなければ、と、気ばかりが焦る。

聞きたい事、話したい事は沢山あった。



アメリカ  
おぼ  
美国行きのこと、小母さんが家に来ていたこと、最近どうしてる  
のか、美国の連絡先を教えて欲しい、最近、可笑しいな夢を見たんだ・  
．．．．．　　これらはまた、貴重な話題でもある。

シユンは今一人、絶好の機会。  
チャンス

ぼくは意を決して息を吸い込むと、瞬時に笑顔を貼り付けた。

「シ」

「シユン！ここにいたのか。みんな探してるぞ、写真撮りたいって  
奴もいてさ」

見計らったかのようなタイミングの良さで、数人の男子生徒がた  
ちまちシユンを取り巻いた。その中に隠れてしまい、ぼくからは姿  
さえ見えなくなってしまう。

張り付いたままの笑顔と開いたままの口、中途半端に浮いた手と  
足を硬直させたまま、楽しげな笑いを見送っていた。

その姿が消えるまで、そうしていた。

「．．．．．はあああああ」

それはのどかな昼休み。

ぼくはさっきまでシユンのいた窓辺へ肘をつき、外に向かって大  
きく大きく溜息を洩らす。伸ばした視線の先には、サッカーを楽  
しむクラスメイトたちの姿があつたが、今はそれさえどうでもいい  
気分だ。

すれ違う運命なのだろうか、ぼくとシユンは？

変な言い方だが、そうとしか考えられない。

「だいたい、シユンの奴も悪いんだ．．．．．ぼくばかりどたば  
たして、あたふたして．．．．．なんか悔しいな．．．．．」

ツキンと、胸が痛む。

まるで波紋のように、その痛みは全身に波及する。何故だか分か  
らない。無性に泣きたくなった。

シユンとまた昔のように、何の憂いも無く、他愛ない話なんかで  
笑い合いたい。

ただ、それだけの思いであるのに。

でももしかしたら、それは一方通行の思いでしかないのかもしれない。勝手に自分が思っているだけで、シユンはそんなことを望んでいないのかもしれない。

そうでなければ、きつとこんなにすれ違うはずがないのだ。

美国行きの噂が流れてもう数週間が経つ。周囲の人間の様子と、本人の様子を見ても、出鱈目な話でないことは明らかだった。

そんな今になっても、シユンから話しかけてこないのは

「……なんだよ、あいつ……」

やり切れない思いがじわじわ心を満たしていく。

シユンとの距離は今、どれくらいあるのだろうか。

\*

\*

\*

小さい頃からシユンは頭が良く、勉強が良く出来た。

反対にぼくは、勉強なんて全くため、その代わり運動なら誰にも負けなかった。特にサッカーなら無敵そのもの。

基本的になんでもこなすシユンは運動方面がさっぱりだ。走れば転ぶ、ボールを蹴れば転ぶ、時々道を歩いていても転ぶほど。おまけに全く体力がない、いわゆる運動オンチなのだ。

そんなぼくたちが大の仲良しになったのは、お互いに上手く補いあっていたからかもしれない。自分にはないものは、相手が持っている。

だからなのかどうなのか、ぼくはシユンという時が一番心地良かった。

ぼくがサッカーをしている時、シユンはよく木陰に座り、読書をしながら試合を眺めた。退屈じゃないかと訊くぼくに、シユンはいつも首を横に振って微笑った。

ぼくがサッカーをしていない時、シユンは必ずぼくの隣にいた。

いつか二人で丘を登って、ぼーっとしていたことがある。その時にシュンが言った。ぼくたちは戦国時代では、同じ国に属す騎士なんだと。

「騎士？」

聞き返すべくにシュンは頷く。

「誓いを済ませた騎士は、馬に乗って、大きな剣を振りかざし、一緒に戦場を駆け抜ける。とても勇敢で無敵の戦士なのさ」

そう言って、頭上に広がる青い空を見上げた。

そのまま言葉のないシュンが気になり、ぼくは横顔に視線をやる。細められた綺麗な瞳は、どこか幸せそうに、遠くを見詰めていた。

「……シュンも、騎士だったのか？」

「ん？」

「だから、戦国時代。おまえそんなひよろひよろしてて、運動もまるきりダメでさ」

ぼくの言いたい事を察したのだろう、「そうだね」と呟くシュンは、相変わらず空に瞳をやったままだ。

「でも無敵だったってことは、きっとぼくとシュンが一緒に戦ってたからだな。おまえ頭いいから、戦えなくてもぼくに色んなことを教えてくれる。ぼくは戦場でその通りに動いて、敵に勝つ。うん、これなら確かに無敵だ」

笑い声を上げるぼくをシュンが振り返った。その瞳にぼくは釘付けになる。

微かに水分を含んだ涼やかな目が、柔らかくぼくを映して揺れている。

泣いているのかと、思った。

「シュン……？」

「……戦場にいるんだ……戦場について、騎士は、戦いながら扉を探している。とても、とても大切なものが、その中にあるから……」

シュンは空想好きだった。

ぼくには思いもつかない、大きな世界が広がっているに違いなかった。

けれど、なぜだろう。

扉を探している。

それはシュンの心の声のような気がして、ぼくは無性に泣きたくなった。

あの時、きつとぼくは、シュンと一緒に戦う騎士でありたかった。ぼくが、それを望んでいたんだ。

しかしシュンはそれを拒んだ。

自分は一人でも大丈夫なのだと、そんな決意が込められている気がした。

### 第三話

敵もこの度は本気だった。

この所の沈黙を破り、全軍率いてやって来た。

捨て身の奇襲作戦。

「ひるむなあ！ 迎え撃て！」

指揮官の号令で、ぼくも戦闘を開始する。勢いよく駆け出そうとした、まさにその時。

ふと、駿が隣にいないことに気付く。

すでに混乱し始めていた周囲を見回しても、その姿はどこにも見当たらない。

「………駿？」

いや、いないはずがない。ついさっきまで一緒だったのだ。

この混乱ではぐれてしまったのか。

「駿！ どこにいる！？」

不安だった。あいつが一人で大丈夫だとは到底思えなかった。

平気な顔をしてはいるが、戦場での経験はまだ浅い。ぼくが隣にいないければ 守らなければ すぐにやられてしまう！

「返事をしてくれ！ 駿！ 駿！ どこだ ！」

乱れ飛ぶ矢を掻い潜り、あっという間に迫った敵軍と刃を交えながら、ぼくは必死に視線をめぐらせる。

「駿 ！ 駿 ！ あっ！」

ざくり、と、重く焼けるような痛みを感じた。異形の騎士がぼくの体を切りつけたのだ。

滴る鮮血に意識が遠のき、重力が働く方向に体が落下する。敵が、見えない。

「………駿！ どこだよ！ 返事してくれ ……っ」

答えて。

頼むから。

駿がいないとだめなのは、ぼくの方なんだ

「 綺羅？」

突如返ったその声に、ぼくははっと瞳を上げた。

駿が、そこにいた。

「駿・・・・・・・・平気、か？・・・・・・・・」

「ぼくは無傷だ。大丈夫」

「それなら・・・・・・・・良かった・・・・・・・・心配した・・・・・・・・急に、いなくなるから・・・・・・・・」

「ごめん。失くしてしまったものを探しに行っていたんだ。あれが無いとぼくは・・・・・・・・もしかしたら敵に盗まれたのかもしれない・・・・・・・・」

駿が悲しげに目を細めた。やり切れないと、今にも泣きそうにな

りながら。

ぼくは無情にもだんだんと滲んでくる視界を必死に繋ぎ止めたくて、目の辺りに力を込める。

もう二度と、駿を見失わないように。

「やっぱり、ぼくはもう一度探しに行くよ。大切なものなんだ。ごめん、綺羅」

駿、と、呼んだつもりが、声にならなかった。

徐々に遠ざかる、青白い綺麗な顔。

どこに、行くって？

やっと見つけたのに、去って行くなんで、やり切れないのはこっちだ。

あんまりだよ駿。

おまえは一体、何を探してる？

それはぼくよりも大事なもののなか？

「・・・・・・シ・・・・ユ・・・・ン・・・・・・」

かろうじて呟かれたその名に返る声はすでにない。

ぼくたちの距離も、もう戻らない・・・・・・。

\*

\*

\*

夏を感じさせる五月の空は、心地よい風に雲が散らされ、爽やかな体を現している。

そんな天気には不似合いな重苦しい溜息を吐くぼくは、最近とても憂鬱だった。

人伝にシユンがもう学校に来ていないと聞いたのはついさっき。

それが駄目押しになった。

「綺羅あ、今日サッカーするだろ？後で一緒に行こうぜ」

そう、友人に当然のように聞かれ、ぼくは疲れ切った表情を向け

ると言った。

「やめとく。またな」

「はあ！？待てよ綺羅！最近いつつもそれじゃないか、おまえ変だぞ？大丈夫か？」

「・・・・・・大丈夫・・・・・・」

「おいおい綺羅！」

大丈夫・・・・・・なんかじゃない。瀕死だ。

午後、学校からの帰り道。ぼくは一人考えていた。シユンと話すべきか、どうかを。

近頃本当に可笑しな夢を見ている。昔シユンの言っていたのとそっくりな、無敵の騎士として、ぼくたちはいつも戦場において、一緒に走っていた。

けれどこの間、ぼくはミスをした。無敵であるはずのぼくが、やられてしまった。

しかもシユンに見捨てられて意識が途切れた。目覚めた時のあの複雑な気持ちは、形容出来ない程の苦々しさだ。

そんな所へシユンの美国行きが迫っていることを知り、ぼくの心の中はまさに混沌としていた。

「くそー。どうしたらいいんだっ」

ヤケになることで解決したら、どんなにいいか。大きな溜息を吐き出し、ぼくは家に帰り着いた。

「おかえりなさい、綺羅。ちよっと、いい？」

出迎えた母が手招きをする。

促されるまま居間に腰を下ろすと、母親と向き合った。

「どうしたの？まだテストの答案返ってきてないけど」

半分冗談で半分は本気だった。それ以外にどんな話題があったのか、この時のぼくには思いもつかなかったから。

母は一度、深呼吸をした。

「あのね、落ち着いて、聞いて頂戴・・・・・・。さっき、シユンくんのお母さんから、連絡があつて・・・・・・」



なぜか、母が言葉を詰まらせた。

突然、得体の知れない緊張が、一気にぼくの体を駆け抜ける。

「ああ、知ってるよ………美国に行く事になったんだろ？もう学校に来てないから、きつとすぐ出発するって、挨拶を」

黙って、ぼくを見詰める母の目が潤んでいた。

息苦しい。

「綺羅、シュンくんがね」

続けて紡がれた言葉はまるで、ガラスが弾けたように耳障りなものだった。

ぼくは一体、どんな表情かおをしていたのだろう。

母は口を覆って、とうとう嗚咽を洩らした。

あまりに重々しく、冷ややかな言葉だったからだろうか。

綺羅、シュンくんがね

言わないで。

それ以上。

亡くなったのよ………。

あれは、夢の世界だと思っていた。

戦国時代を翔ける、勇敢で、無敵の騎士。

「……うそだよ、そんな……」

「……シュンくんは、ずっと、心臓を患っていたんだって」

「……まさか……そんなの、ありえない」

「……もう、ずっと……母さんも、知らなかった……この間、シュンくんのお母さん、来られていたでしょう……その時に知ったの」

頭が痛い。割れそうに痛い。

夢の話だ。すべて、夢の。

「でも、あいつ………美国に行くって話………だって

この間だつて、．．．．．あんなに、元気で．．．．．」  
「．．．．．なぜ美国に行くつもりだったか、知ってる？」

ぼくは首を振った。理由など考えたこともなかった。

「心臓の手術をするためだったそうよ．．．．．本人の強い希望  
でね．．．．．」

「．．．．．」

ぼくは言葉を失くしていた。

今起きていることは一体何なのだろう。

母はなんと言ったのだっけ。

シュンが死んだ？

「うそだ．．．．．全部うそだ！元氣だったじゃないか！歩いて  
たじゃないか！笑ってたじゃないか！」

「綺羅．．．」

「母さんは知らないんだ！あいつを見てないから分からないんだ！  
死ぬはずがない！シュンは死なない　っ！！」

それはぼぼ、怒りに近かった。

馬鹿馬鹿しくて、悲し過ぎて、涙も出ない。

それなのに目の前が霞む。何も見えなくなる。

恐怖。

とてつもない、暗闇。

シュンがいないとだめなのは、ぼくなんだよ

言いたくて、言えなかった。

もう戻らない距離。

永遠の、距離。

## 第四話

ぼくがあれほど躊躇<sup>ためら</sup>って開けられなかった扉を開き、参加した葬儀。

そこで、静かに眠るシュンを見て、やっとぼくにも実感が湧いた。呼びかけても答えない。そこにシュンはもういない。

「綺羅くん」

「……小母さん」

目を腫らしたシュンの母親が、今日はどうもありがとと頭を垂れた。

反射的にお辞儀を返し、顔を上げたぼくの目に、小母さんの微笑みが映る。

「シュンと仲良くして下さって、綺羅くんには本当に感謝してるのよ」

「いえ……」

曖昧に呟く。

なんと言ったものか、悩んでしまう。

「昔の話です。最近は全く、機会がなかったから……」

「……ええ、そうだったわね」

気まずい思いを持て余し、ぼくは思い切って聞きたかったことを口にしてみる。なぜ、心臓の病気をシュンは隠していたのか。

「……実は、全部シュンがそうして欲しいと言ったものだから……綺羅には絶対に教えないでと、そう言っていたこともあったわ……ごめんなさい」

「謝らないで下さい。そうだったんですか……シュンの、やはり聞かなければ良かったと、少し後悔した。あんなに毎日一緒にいて、全く気が付かなかったばくもどうかしている。

体力がないから息をきらしたのではなかった。運動オンチだから運動が出来ないのではなかった。全部、心臓の病気のせいだったん

だ。

それでも、どうしても、思わずにはいられない。

どうしてばくに、言ってくれなかったんだ、と。知っていたらそれなりのことが出来たかもしれないのに。

少なくともあんなに悩まず、いつもシュンの側にいたはずだ。

「綺羅くん、許して頂戴ね。あれでもあの子、心臓を治そうと必死になっていたの。美国で手術が受けられると知って、とても喜んでいたわ……もう少し、早ければ、それだけが悔しいけれど……」

一旦言葉を切り、シュンの母親は気丈にも笑ってみせる。

そして、シュンに笑顔が増えて嬉しかった、そう続けた。

「綺羅くん」

「はい」

名前を呼ばれ返事をしたばくに、そつと差し出されたのは一冊の本。

「これは？」

「シュンの机の引き出しの中にあつたもので、私にもよく分からないのだけれど……」

「……これ、シュンがいつも持ってた本です。見覚えがある」

「そう……やっぱり綺羅くんなら、何か知っているとってたわ。……実は、あの子倒れてから、うわ言で“鍵が見つからない”とずっと繰り返していてね……」

「鍵？」

「ええ。私たちも何の事だかさっぱり分からなかったのだけれど……あの子の部屋を整理していて、それを見つけたの。ほら、ここに、錠がかかっているでしょう。だからもしやこのことでは、と思って」

シュンの母親は本を開く側の所に付いている黒い錠を指し示してみせる。

ぼくは本を開こうとしたが、鍵がかかっていて開かない。

「鍵は………」

「それが見つからないのよ……偶然なのかしらね……でも、うわ言で言うくらいですもの。よっぽど、大切なものだったみたいだわ………」

瞬間ぼくは、はっとした。

いつかシユンが言った言葉。

騎士は戦いながら、扉を探している。とても、とても大切なものが、その中にあるから………

……『扉』、『大切なもの』………

「これが、シユンの、探していたもの………」

ぼくはどこかで腑に落ちないでいた。

自分で持っていたのに、なぜ？

「……良かったら、その錠をこじ開けて、中を見てやってくれないかしら？」

ぼくがあまりに本を凝視していたせいだろうか。

そうしてぼくは、そのまま何となく、あの丘へと登った。

シユンに導かれたのかもしれない。

近くにあった石で錠を壊し、ぼくはとうとう、その『扉』を開いた。

「……あれ？これ、本じゃない……ノートだ」

最初のページは白紙だった。

それを捲ると、次のページには一行だけ文字が書いてある。

それはシユンの文字だった。

綺麗に整った、シユンの文字。

「……『綺麗と駿のものがたり』……小説………？知らなかった。あいつ、これをいつも書いていたのか………」

・・」

そのノートの中には、シュンの空想の世界が広がっていた。  
ぼくに話してくれた、あの騎士のものがたりだ。

時は戦国時代。この国には勇敢で、無敵の騎士がいる。名は綺羅。  
日に焼けた褐色の肌、巧みな馬術に確かな剣の腕。誰もが恐れる、  
戦士である。

そこにもう一人、騎士になりたい病弱な男がいた。名は駿。綺羅  
とは反対に、顔色は悪く、肌も生白い。およそ戦場向きではない男  
だったが、彼にはどうしても騎士になりたい理由があった。

あの英雄綺羅と、一緒に戦場を駆け巡りたい。自由に、なに憂う  
ことなく、どこまでも、どこまでも・・・

「『どこま』っ・・・ううっ・・・でも『でも』っ・・・  
・・っどこま、でも』っ・・・ううっ・・・！！」

涙が溢れて止まらなかった。

しゃくりあげて泣いた。

胸がいっぱいで、何も考えられない。

「シュン・・・っ！シュン・・・っ！おまえ、ばかだ  
よ・・・っ、ああっ・・・！」

・・・綺羅、綺羅・・・

ぼくの病気のこと、秘密にしていたのはね、君の足枷になりたく  
なかったからだよ。

だってぼくは分かっていた。

このことを知ったら君は、自由を失ってもぼくの側にいてくれる  
ってこと。

それだけはしたくない。それだけはしてはいけない。  
だからぼくが、綺羅の所まで行く。その時は思い切り、風を切っ  
て走るんだよ。

きつと、気持ちいいはずだ。

綺羅と肩を並べられる日がくるのなら、どんな苦しいことだって  
ぼくは耐えてみせる。

きつと、がんばれる。

・・・・・・・・

シュンの小説の中には、数え切れないほど綺羅の名前があつた。  
それがぼくのことであり、これはシュンの本当の願いだったのだ  
と、漸く分かった。

サッカーをするぼくを見ながら、シュンはいつも空想していたん  
だ。一緒にボールを蹴って走る二人の姿を。

ここに記録されているのはシュンの夢であり願いだった。この扉  
を開くための鍵が、美国で手術を受ける事だったに違いない。

「シュン！っシュン・・・・・・・・あぁあっ！！」

ぼくは溢れ続ける涙も構わず、喉が干切れそうなほどその名前を  
叫び続けた。

帰らない日々を渴望して。

あの空に。

・・・・・・・・

綺羅へ。



ぼくの英雄、そして希望。  
大好きだよ、綺羅。

綺羅     . . .

. . . . .

）  
F I N  
；

#### 第四話（後書き）

少年二人の友情物語でした。

お付き合い頂いた方、どうもありがとうございました^^

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4577e/>

---

キラトシュン

2010年10月8日15時46分発行